

# アフリカの人々と名付け 46

## 双子がいっぱい——その名付け

小馬 徹

人類はアフリカで生まれ、北上しつつスエズの地峡部を通してヨーロッパへ、そしてアジアへと拡散し、やがて地上に満ち溢れた。生物としての人類にとって、アフリカは何処にもまして恵み深い、母なる大陸だったのである。

その悠久の記憶のゆえでもあろうか、アフリカ滞在中に子宝を得る日本人夫妻が少なくない。結婚後幾年もの間子供がなかったある人類学者が、夫人を伴って研究に訪れたアフリカで間もなく幸運に恵まれた例を知っている。

### 双子がいっぱい！

確かにアフリカは豊饒の大地だ。アフリカに長く滞在した人なら、恐らく誰もが、アフリカには双子が多いという印象を持つだろう。私自身の経験では、最初に寄宿したケニアのキプシギスの家には、双子の幼い姉妹がいた。また、助手として調査を手伝ってくれた幾人かの若者の内、なんと三人もが双子の一方だった。加えて、二番目に寄宿したキプシギスの家庭の主人は、三つ子の中でも三番目の、もっとも弱い子供だったようだ——彼の特殊な個人名でそれが分かるのだが、これは後ほどあらためて論じよう。

日本人がアフリカの人々には双子が多いと感じるのは偶然ではなく、それなりのわけがある。統計によれば、双子が生まれる分娩の割合は、概ね北欧では60回に一度、世界平均では80回に一度、日本では100回に一度である。そして一般的にコーカソイドはモンゴロイドよりも率が高く、ネグロイドは更に高率である。日本は、中国やベトナム、あるいは南米諸国よりはやや高い率だが、アフリカとの落差は相当に大きい。この事実が先の印象の基盤にあるだろう。

### 双子を忌む社会

日本では双子が少ないだけでなく、昭和初期までの民俗には、双子の誕生を喜ばない傾きが見られた。多胎妊娠は母体に過重な負担をかけ、妊娠中毒症、貧血、出血などを起こし易く、流産、早産、死産の確率も大きくなる。正常に分娩した場合でも、生命の危険は赤ん坊で通常の5倍、母親は2倍にもなるという。そして養育の困難も大きかった。多胎児が忌まれるのも、故のないことではなかった。

東北では、蓑笠を着けた父親が屋根に登って妻が双子を産んだ旨を大声で叫べば、次は双子出産を防ぎ得るとした。また、男女の双子は心中した男女の再来と見なされて殊に嫌われ、佐渡では夫婦子（めっとご）、北河内では畜生腹と呼んだ。この類の双子は、不義の子供と共に真先に間引かれることが多かったようだ。

このような民俗の風は、口承、書承を問わず、日本の文芸のあり方にも影響していよう。神話、伝説、民話、戯曲、小説をわかつた双子を主人公とするものは皆無に近い。近松門左衛門作、享保5年（1720）初演の人形浄瑠璃『双生隅田川』（ふたごすみだがわ）などでも、双子という生のあり方をプロットの主軸にしてはいない。

### 双子という靈感

ところが、ヨーロッパでは双子は靈感の源泉である。旧約聖書のエサウとヤコブ、ローマ建国神話のロムルスとレムス、王子と乞食の民話など、双子を二元的対立原理の二項と見て世界の対立をはらんだ生成発展を比喩的に描く物語が多い。他方、ギリシア神話のカストルとポリュデウケス、あるいはグリム童話60番のように、分身としての生を強調するものもある。

とは言え、双子の民俗が陰影に飛んだ豊かな色彩に縁取られつつ、驚くべき多様さをもって展開するのは何と言ってもアフリカであり、それは現代文化にも明瞭に影響を与えている。例えば、M. S. ファルスティ作のスワヒリ語小説『クルワとドート』(*Kurwa na Doto*)が1960年以来版を重ねている。クルワはスワヒリ世界で双子(*mapacha*)の初生児、ドートは次生児の定式的な名だが、二人は外見は瓜二つでも性格が正反対の男性として描かれている。

### 双子の親という幸せ

さて、アフリカに暮らすうちにその豊饒性に触発されて自ら双子を生みなし、この経験を通してアフリカの彩り豊かな双子文化複合へと誘われていった日本人経済学者がいる。

吉田昌夫がウガンダの首都カンパラに滞在していた1964年から1966年当時、この国はまだ連邦制をしいていて、カンパラはガンダ王国の都でもあった。ガンダ王の讃え名の一つに「ふたごの父(Sabalongo)」があると述べた後で、吉田は次のように楽しげに報告している。

「それほどブガンダではふたごが大切にされていた。ふたごの男の第一子はワスワ(Waswa)、男の第二子はカトー(Kato)と名付けられる。また女であれば、第一子はバビリエ(Babilie)、第二子はナカトー(Nakato)と名付けられる。さらにふたごの父はサロンゴ(Salongo)、母はナロンゴ(Nalongo)という名で呼ばれるようになる。私たち夫婦も、ふたごを連れ歩いているところを見られていたカンパラの町では、『今日は、サロンゴ』、『バナナをあげるよ、持っていきな、ナロンゴ』などと、知らない人からも声をかけられたものである」。吉田は、知人の勧めでふたごの儀礼も行ったのだった。[吉田昌夫「アフリカのふたご」、松本脩作・大岩川(編)『第三世界の姓名』1994]。

なお、彼は触れていないが、双子はムカサ神の特別の好意の印とされ、その父親は妻が双子を産んだという報を聞くとすぐに彼女の小屋の

屋根に登り、「ムカサが私に子孫を与えたもうた」と呼ばれるのだ。前述の通り、ほぼ同じ行為が日本の東北地方では不運の表現であり、また再発予防策だった。ところがガンダでは、それはまさしく幸運を公表する行為なのだ！

当時マケレレ大学の教育学のある教員は、「三組の双子を持っていたから、彼の栄誉はなかなかのものであったに違いない」と思われた。実際、吉田が1993年に同校を再訪したとき、同氏は副学長になっていた。吉田が「さっそく『サロンゴ』と呼びかけると、彼は大変びっくりし、喜んだ」という[前掲書]。

### ガンダの双子の名前

吉田はガンダの双子に関する文化複合の一端を、いきいきと映し出してくれた。そこで、もう少しその広がりを押さえておこう。

ガンダでは、双子とその親だけでなく、双子の前後の子供たちにも、定型的な名前を与える。即ち、双子の直前の子供はKigongo、双子の後に生まれた子供は順に、1) Kiza、2) Kamaya、3) Kagwa、4) Kityo、5) KitokeまたはKitereraと続く。これらの名前は、子供の性を問わない。ただ近年、女兒なら2') Nakamaya、3') Nakagwa、4') Nakityoとする傾向がある—Na-は女性接頭辞。なお、ガンダでは女性名は、対応する男性名から男性接頭辞Se-を取り除いてNe-を付けた形になる[Nsimbi, N. B., “Baganda Traditional Personal Names”, *The Uganda Journal* 14 (2), 1950]。ただ、4') Nakagwaを挙げない、より新しい書物もある[Kyewalyanga, F-X., *Traditional Religion, Custom and Christianity in East Africa*, 1976]。

さらにまたンスィムビは、双子の母親に与えられるNalongoはNyina abalongoの短縮形であろうかと、一切注釈なしで述べている[Nsimbi前掲書]。nyinaは「(誰かの／何かの)母」、abalongoは「双子」(複数形)で、Nyina abalongoは「双子の母」の意味である。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)